昭和天皇 ― 国民とともに歩まれた生涯

代表執筆者
藤岡　信勝

立憲君主的立場を貫きつつ、国民の安寧を祈り続けた、無私と献身の生涯とは。

まじめで誠実なお人柄

昭和天皇は20世紀が始まる年、1901（明治34）年の4月29日、皇太子時代の大正天皇の第一子として誕生しました。御名は迪宮裕仁。幼少のころから、極めてまじめで誠実なお人柄でした。

即位ののち、鹿児島から軍艦にのって帰京されるとき、天皇が暗くなった海に向かってひとり一人挙手の礼をされているのをお付きの者が見つけて不思議に思いました。そこで海の方を見ると、遠く暗い薩摩半島の海岸に、お見送りをするために住民が焚いたと思われるかがり火の列が見えました。天皇はそれに向けて答礼をされていたのです。

立憲君主的な立場

昭和天皇は1921（大正10）年にヨーロッパを訪問し、イギリス国王ジョージ5世と親しく語り合いました。そのとき、イギリスの政体「立憲君主制」を学んだといいます。「君臨すれども統治せず」という君主のありかたは、武家が政権をとり、朝廷は国家の安寧を祈るという日本の政治形態にも似ていました。天皇は「もし、自分が良いと思うことは裁可し、嫌なことは裁可しないというならば、これは専制君主と変わらない」と述べています。

しかし、国家が危機に陥り、政府が機能しないときには、君主が自ら決断しなければならない場合があります。昭和天皇も、国の命運にかかわる重要な場面で、自ら決断されたことがあります。

1936（昭和11）年の二・二六事件

の時、天皇は、将校たちの武力行為に対しきびしい態度でのぞみ、反乱軍とみなして鎮圧を命じました。

945（昭和20）年8月の終戦も昭和天皇の決断でした。「ポツダム宣言」を受諾して戦争をやめるか、ほんど本土で決戦をすべきか、政府内の意見が二つに分かれ、どちらとも決することができなくなったとき、鈴木貫太郎首相は、天皇にその判断を委ねたのです。昭和天皇は、「わたしは国民を守りたい」と、終戦の聖断を下しました。

マッカーサーを感動させる

終戦の年の9月、天皇はみずから、占領軍（GHQ）総司令官マッカーサー元帥のもとを訪ねました。元帥は、天皇が命乞いや弁解に来たのでは、と思いました。歴史上、どこの国の指導者も、戦争に負けると財産を持って亡命するか、自分と家族の安全を求めてくるのが普通だったからです。

しかし、天皇の口から出た言葉は、「私は、国民が戦争遂行に当たって政治、軍事両面で行ったすべての決定と行動に全責任を持つ者として、私自身をあなたの代表する諸国の採決にゆだねるためお訪ねした」というものでした。元帥は、「死をも伴うほどの責任、明らかに天皇に帰すべきではない責任までも引き受けようとする、この勇気に満ちた態度に、骨の髄までゆり動かされた」と『回想録』に記しています。

（（　後略　））

藤岡信勝　プロフィール

昭和18（1943）年、北海道生れ。北海道大学教育学部卒。北海道教育大学助教授、東京大学教育学部教授、拓殖大学教授を歴任。「自由主義史観研究会」代表、「新しい歴史教科書をつくる会」会長。著書に『教科書が教えない歴史』1～4（扶桑社）、『汚辱の近現代史）』（徳間書店）『「自虐史観」の病理』（文藝春秋）、『教科書採択の真相』（PHP新書）などがある。

（株式会社 自由社 発行「新しい歴史教科書」P258 より）